戦闘シーンを書く企画【スズ・レイゾイールVS神野燎太】

紅月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
戦闘シーンを書く企画【スズ・レイゾイールＶＳ神野燎太】

【Ｎコード】
Ｎ９０９９Ｓ

【作者名】
紅月

【あらすじ】
「だから、あたしは巻き込まれたの！！　あとで聞いたらその主催者はアリスが一発殴りたい奴だったらしいんだけど、それならアリスが行けばいいって思うでしょ？　そしたら「いい実践訓練だったでしょ」って笑って言ったのよ！」【この作品はクロワッサンさん主催の　第一回　戦闘シーンを書こう　参加作品です。会場はこちらｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ４８７０ｒ／】

（前書き）

この話の感想は企画のほうではなくこちらへお願いします。

「まったく、面倒だ。おかげで仕事が増えてる」
そう言ってアリスは顔をしかめて空を見上げた。
曇り空だというのに黒い太陽が雲に隠れることなく存在している。普通の人間には気づけないだろう。アリスも朝から確認して数人にしか見えていないことはわかっていた。
加えて、今アリスが持っている手紙。中は見ていないが、アリスが魔法を使うことで外ににじみ出ている式を読み取れた。アリスのところに来たタイミングから考えると、この中で今起きていることについての説明がされているのだろう。
この手紙がここしばらくの間、自分を激務に追い詰めたものの正体につながるものだとは理解できた。異世界から人を特殊な空間に呼び寄せる。普通はできないができる人間には簡単にできるその所業はちゃんとしなければアリスが管理するこの空間に歪（イビツ）と呼ばれるものが現れる。それは世界が外部から干渉を受けた時に起こる『その世界ではありえないこと』を世界がなかったことにしたときに生まれる。そしてその世界に置いておくと世界に悪影響を与えるため、外に、世界と世界の間に存在する狭間へと放り出す。
アリスが管理する世界はその歪を集め、処理するところ。行き来ができるのは彼女と、彼女が許した存在だけである。
それはさておいて。
「中を見たら強制転移って、どれだけ手が込んでるんだか。てかこれボクが行ってさっさと終わらせてもいいんだけど、止められたし。メイやスタンだと力のバランスがなあ。ジャックはもう向こうに住む気でいるからわざわざ呼ぶのが面倒だし」
この手紙の差出人のおかげで最近起きたことに対して常に後手後手に回らされてしまったし、これからも歪がやってくることを考えるとどうにかしてその鬱憤を晴らしたいのだが……。まあ、別に自

分が参加できなくても、ここへ行く方法はある。この手紙がなければ不可能だっただろうが。
　時計を見ればそろそろ夕方と言える時間だった。廊下を歩きながら考えていると目の前から明るい茶髪の少女が歩いてくる。紺のブレザーに白のブラウス、赤のネクタイをつけていてスカートはチェックの入ったプリーツスカート。鞄も持っていていかにも女子高生な少女を見てアリスはにんまりと笑った。
　少女の方はアリスの笑いには気づいていないようで、声をかけた。
「ただいま」
「おかえり、スズ。ところで今日の空、おかしいと思わない？」
「そうだよね！　友達はみんなおかしくないって言うから不安だったんだよ。って、アリス……？　その、笑いは、なに？」
　同じ意見の仲間を見つけた嬉しそうな顔から一転、不安そうな顔に変わる。まるで何か嫌な予感を感じ取ったかのような顔である。
　アリスはそんなことを気にせず、スズの肩に手を乗せる。素晴らしいほどに清々しい笑顔はまるで「任せた！」と言っているようである。
「アリス。あたしこの週末にやらないといけない宿題があって、だから、ね？」
「どんな宿題？」
　やるべきことがあると言い、その内容を正直に答えながらスズはすでに涙目である。
　対照的にアリスはさらに笑顔になる。宿題の内容は「魔法理論を精霊術と、符術とを比較して述べよ」というもの。そして魔法はアリスの専門分野。
　つまりは……。
「大丈夫。それならボクが満点とれるようなのを作っておいてあげるから」
　ということである。なんとしてでも巻き込まれたくないスズは諦めずに抵抗する。

「あたし、一女子高生。それが完成度が高すぎるの作っていったらやばいでしょ？」
「大丈夫」
「大丈夫じゃない！　こうなったら『動くな、喋るな』！」
スズは最後の手段としてスズは自分の力を使った。
しかしこの力はアリスには効かない。事実上の降参なのだが、諦めることはできなかった。
「まーまー。諦めなよ。こっちでいろいろと手は回しとくから。これ、ルールが書いてあるし持っていきなよ。『陣式（ジンシキ）渡（ワタリ）』」
有無を言わさずアリスは持っていた手紙を押しつけ、無理やり手紙を開かせた。その時に巻き添えにならなようにと、スズから少し距離をとった。
スズは不思議に思いながらも手紙の封筒を開いた。それにあわせて足元に突如できた穴にスズは落ちていった。
（帰ってこれるかなあ）
不安になりながらそう思ったスズが最後に見たのは笑顔で手を振るアリスだった。

◆◇◆◇◆◇◆

「テンセイ、僕の対戦相手が決まったそうだけど」
神野燎太はそう言って誰もいない空を見上げる。横にいる友人をあえて見ない、というあたりに彼がどれだけ今の状況を認めたくないのかがうかがえる。話を振られた友人はニヤリと笑って燎太の肩を叩いた。
「そうだよ。もうすぐ来るはずさ」
「テンセイが呼んでいるんじゃないのかい？」
「どうやら向こうで誰を送るか悩んでいるらしい。でも、そろそろのはずだ」
だから俺はこれで、と言って友人――五十嵐天成はその場から消

え去った。その直後、今まではただの広い空間だったところに木が生えてきて、森へと変わった。これらの変化に燎太はただため息をついただけだった。
　そしてそれとほぼ同時に、燎太の目の前の空間に黒い線が走る。燎太の目の高さぐらいで一直線に引かれた線。そこから落ちてくる少女。べしゃ、という効果音のようにしりもちをついた。地面に座り、何があったのか少し涙目になっているが、年齢は燎太とそう変わらないだろう。
「君が僕の対戦相手？」
「ちょっと待ってちょっと待ってちょっと待ってー！！」
　少女は全力でそう言うと姿勢を直し座ったまま手に持っていた紙を真剣に読み始める。
　構えを作った状態で拍子抜けした燎太は観察することで少女が自分に奇襲をかけようとしていないことを理解し、おとなしく待つことにする。金色、と言うほどには明るくなく、茶色と言うには明るい色の髪にゆるいパーマをかけた少女はしばらくして落ち着いたのか手紙をくしゃっと丸めて一緒に持ってきた鞄に入れた。
　少女はその鞄を持って立ち上がり、まっすぐ燎太のほうを見る。
――気のせいだろうか、先程よりも少女が先程よりも泣きそうになっているのは。
「待たせてごめんなさい。あたしはスズ・レイゾイール。スズでいいよ」
「神野燎太。僕も燎太でいいですよ」
「燎太……？」
　互いに名乗った後、首をかしげてまじまじと燎太を見つめるスズ。その理由がわかった燎太はさらに言った。
「男ですよ」
「嘘！」
　燎太の付け加えた言葉にスズははっきりと否定した。きれいな黒い髪に黒いコートを着た燎太はどこからどう見ても女のシルエット

だったのだ。それを強調するように胸はちゃんと膨らんでいる。顔も男に見えるような女に見えるようなといった中性的なもの。ゆえに男にはとてもじゃないが見えない。

あれで男。ここはそんな根本的なところから世界法則が違うのか。あたしより美人じゃないか。その思いを口には出さないスズ。そんなことで言い争っても今は何も進まない。

「じゃあ、百歩譲って燎太が男だとして」

「譲る必要があるんですか？」

「……とにかく。このままじゃ話は進まない。そうでしょう。あたしは燎太と戦えばいいんだよね？」

「そうですよ」

その言葉に燎太は構えなおす。身長ほどあって、両端に刃つけた武器を薙刀で言うところの下段に持つ。スズは自然体のまま立つ。精神統一。両者は何も言わずに向かい合った。

先に行動を起こしたのはスズだった。駆け出したかと思えば燎太に背を向けて走り出した。後ろにいる燎太からの攻撃なんて事をまるで考えていないかのように燎太の視界から消えた。燎太はさほど慌てずにそれを追いかける。追跡するためのスキルはちゃんと持っている。時折、立ち止まっては千里眼でスズの位置を確認していく。遠くを見ていると近くが上手く見えない。

スズの方は簡単に追いつかれないようにと大地を盛上げ、地形に起伏をつけつつ移動しているようだった。森という土地を活かすようにして時折、木々を大きく成長させたりもして追いかけにくくしているようだ。観察すればスズがどんな異能を持っているのかは分かった。スズの能力は『言（グン）を送る』。見ればなんとなくわかるが言葉を使う異能だとは予想できる。ただ、言と言葉の違いがわからなかった。とりあえず、言葉を使ってものを操作するタイプのものだとして燎太はゆっくりと確実にスズとの距離を詰めていく。

「『貫け』」

勢いよく木の枝が燎太に向かって伸びる。驚きはしたもののスズ

の異能がわかっていればそれは、動きを止めてしまうほどのものではない。燎太はそれらの軌道を見切り避ける。量が多いだけで狙いは甘く、避ける道ができていたため避けるのはたやすかった。木の枝が伸び、地面に突き刺さった分だけ土が盛り上がる。

スズも今のでしとめることができたとは思っていない。自分の能力は対象が見えていないと操ることも狙いを定かにさせることもできない。だから燎太の位置を確認できない以上追撃するのも無駄なことである。隠れている木の裏でそんなことを考えながらスズは燎太の前へと姿を現した。

「『飲み込め』」

その一言で燎太の周りの土が盛り上がる。燎太はそれを前進し、スズに突撃することで回避、持っていた武器をスズに向かって振り下ろす。燎太に対しての攻撃は燎太がその場にいれば彼を閉じ込めていたかのような形をとっていた。燎太はそれを確認しない。スズにかわされても気にせず武器をさらに回せばもう片方の刃がスズの左肩をすり抜けた。油断した。両端に刃がついていることをすっかり失念していた。さらに武器を回転させ追撃をやめない燎太の前に土壁を出現させたところでスズは気づいた。まだ腕があるのだ。焼けるような痛みは確かにある。無駄にアリスに鍛えられていなかったら今頃この痛みで動けなくなっているころだ。

「僕の友人――今回のことを企画した人物なんですけどね。ここは彼の作ったルールが適用される空間で、怪我はなくても受けた攻撃の強さに合わせて腕が使えなくなったりするそうですよ」

おかげで性別を気にして手加減するなと言われています。僕は女の子にはあまり攻撃したくないんですが。

土壁を壊すのではなく消し去ってスズの目の前に現れた燎太はそう言って特に攻撃を仕掛けずにスズに教える。なるほど確かに、スズの左腕は全く動かない。服が破けていないのもうれしい仕様だ。

しかし、この距離。歩数にしてスズの一歩。近すぎる。スズが言（ゲン）を使っても燎太が攻撃する方が早いだろう。

「近すぎましたね。これじゃああなたが攻撃できないようですね」
「え？　あたし、なんか言った？」
「いえ、僕の特技ですよ。読心術です」
距離をとってゆったりと構える燎太。視ることで相手の異能がわかることは言わなかった。
「ずいぶんと余裕ですね……」
どうやら彼なりの女の子への優しさらしい。スズはそういうことでなめられているとは思わずありがたくその距離を有効利用させてもらう事にする。燎太よりも自分の方が弱い、というのはなんとなくだが分かる。だが、それであきらめるわけにはいかない。戦うならば負けない努力をする。彼女が戦う術を学び始めた時から言われ続けていることが頭に浮かんだ。
とりあえず、攻撃だ。
「『貫け』」
先ほどよりも精度が上がり、量も増やして木の枝を攻撃に使用する。どうだ、避けられまい。しかし、むこうのやさしさで勝てたとなるとアリスになんと言われることやら。とりあえず勝った。あれを防ぎきったらそいつはもう人じゃない。そう思いつつ木の枝によって視界が悪くなった前方を見やる。
「そういうのって、フラグって言うんですよ」
声に驚き、見る。そこには燎太が立っている。怪我が怪我として見えないせいでダメージを受けているのかもよく分からない。訂正、うれしくない仕様だ。
「それと僕は人間ですよ」
心なしか、攻撃に使った木が少なくなったような気がする。スズは何もしていないし、減らすようなことはできない。
なんだろう。フラグってのはわかるが、あれを耐え切った人間にはフラグとかは関係ない気がしてならない。
「なんで無事なの」
「僕の異能ですよ」

スズは背を向けて走り出す。燎太のダメージを確認しているだけの余裕はない。動かない左腕が邪魔だが、右腕で押さえながら燎太から、燎太を視認できる程度に距離をとる。異能ってさっきの読心術と違うのか。

「ええ」

「『撃ち抜け』」

燎太の肯定とスズがさらに言を送ったのは同時。スズは牽制にと木の葉を弾丸と見立てて撃ちこみながら少しずつ移動していく。

燎太の方はスズの思考を読み取りながら自分の体の状態を確認する。大きな怪我をしないように軌道を読み、避け、透過能力を使っていたのだからそれもそうだろう。

「すげえ、元気だよね……」

燎太の様子を見ながらスズはそうつぶやいた。自分は左腕が使い物にならず、向こう側はたいした負傷はなし。なにやら物体を消す力を持っている気もする。いくつも能力を持っているのだろうか。でもどこかに共通点があってもいいと思うのだが、わからない。

今のもミスをせず、かといって近距離では自分よりも強い。そうなると決定打となる技がない。あることにはあるが、その技はスズにとっては禁じ手だ。自分自身で使わないようにしている技。

「ま、これでだめだったら、あきらめよう」

どうやらこの空間では痛みを耐えることができるならば怪我は行動の妨げになるようでならない。左腕の付け根はやはり痛むが、それはまだ我慢できる。それならば、特攻をかけてもいいだろう。普段なら絶対にやらないことを考えている自分に笑いが浮かぶ。アリスに感化されてきたかな。そんな思考すら読んでいるであろう相手を見据えて、先ほどから近づいてきている燎太に向かって宣言をした。

「このままじゃあたしは燎太に勝てそうもないから、次で最後にしたいと思うけど、どう？」

「……別に、僕はそれでかまいませんよ。つまりそれを耐え切った

ら僕の勝ち、ということですね」
「ええ」
　燎太はスズが何を仕掛けてくるのかを、スズを観察することで窺っている。どうやら向こうは最後の一撃を出すまで待っていてくれるらしい、深呼吸してスズはしっかりと燎太を見据えた。
　狙いは――。
「『津波になれ』！！」
　勢いよく盛り上がった土が津波のように燎太に迫る。巻き込まれた木々は津波に飲まれた車のように押され、流されていく。それだけの質量。避けることができない燎太は当然のように透過能力を発動する――。
「『貫け』！！」
　タイミングを見計らうように後ろから迫るプレッシャーから逃げるようにして前へと移動するスピードを上げれば、それまでいたところに木の枝が突き刺さる。燎太の能力は眼による異能である。ゆえに、眼で追えなければ、視界に入らなければ異能は使えない。
　つまり燎太と戦う時は物量で押し切るか、ものすごいスピードで攻撃を繰り出せばいいということになる。それが神野燎太という人間と戦う時の最善手だということはということは他ならぬ燎太自身が一番よく知っている。
（それに……気付かれましたかね）
　前後左右を問わず勢いよく飛んでくる木の葉はその威力こそ小さいものの燎太の視界を狭くさせるには十分な働きをしている。動かず、あせることなく、燎太は精神を集中させる。最後の攻撃なのだから、必ずまだ何かがあるはずだと思いながら。
　そして、その何かをしのぎきれば――。
「僕の勝ち、でしょうね」
　実際のところ、スズは燎太の異能についてはよくわかっていない。心が読めるらしい、どうやら物体を消すこともできるようだ。身体能力も高いから並大抵の攻撃はかわされるだろう。ほかには何がで

きるだろうか。いや、わかっている範囲でも相手に行動させないほうがいい。
消されるのならば、消すことができないほど大きなものを。
避けられるのならば、避けられない量を。
そんなシンプルな理論を実行しているだけである。
『近距離での戦いを得意とするやつにわざわざ近づいていくなんて愚の骨頂だからね。特にスズはそっちの才能はないんだから、能力を活かして遠距離からちまちま大きな攻撃をしたほうがいいに決まってる。どうしても近づく必要があるんだとしたら、それは――』
自分の能力をようやく制御できるようになったころに言われたことを思い出してしまう。走馬灯なのかと不安になるが、この空間では死ぬことはないと思い出し目の前にある木の葉の嵐を見る。
燎太が出てこないということは中で待っているのだろう。おそらくカウンター狙いだろうということは想像できる。だとしたらそれはきっと正しい。そして、それをしのげば――。
「あたしの勝ちだよね」
愚の骨頂を実行すべくスズは一歩、木の葉の嵐の中に勢いよく駆け込んだ。
スズの突入にあわせて木の葉は勢いをなくし地面に向かってゆっくりと独特の軌跡を描いて落ちていく。燎太がスズを認識するのと、燎太が薙刀を振るうのはほぼ同時。
突き出される必殺の威力を持った刃を紙一重で交わす。
まだ、届かない。もう一歩だ。大きくもう一歩。そう思い左足に強く力を入れた。
突き出したところから回し、下から刃が迫ってくる。
この軌道は、かわしさえすればすでに機能しない左腕をもう一度通っていくはず。すでに使えない左腕、それなら問題は――ない。
「それが両足だったら？」
燎太が不敵に笑ったかのように見えた。下から上に向かって動くはずだった刃の軌道を、足払いするかのような物に変えて一閃。右

足首に刃が入り、痛みでバランスを崩したところで左足にも刃が入った。
スズはバランスをなくし倒れていく中、まだ動かせる右腕を伸ばす。受身のためではない。諦めの悪いその腕を、体を、燎太は反射的に抱えた。
「普通、受身に使うものでしょう」
燎太に向かって伸ばした右腕のことだというのはなんとなく理解できた。しかし、痛みで頭が真っ白になりかかっているスズはそんなことには構わずへにゃっと弱く笑顔を作って言った。
そう、燎太の行動のおかげで燎太に届いたのだ。
『それはスズが最後の一手を使う時だね』
ああ、アリスの言ったとおりだった。彼女は自分の能力をおそらく自分以上によくわかっている。そんなことを悔しいと思うよりも感謝の思いが先に来るのはスズの性格だろう。これ以上考えている暇はない。行動を、起こさなければ――。
「『神野燎太、動くな』」
突如動かなくなった体に驚きを隠せない燎太に対し、スズは弱い笑顔のままである。
「これで、引き分けって事で、どうかな」
「まさかはじめからこれを狙っていたんですか？」
確認はするがそれに対してはスズの心がすでに否と言っている。運がよかったのだと、スズの口はそう動いた。
「燎太みたいな人間はなるべく近くで、名前も言わないと効かないような気がしたから特攻したの。そうでないとこんな馬鹿な真似はしないよ」
最後の一手の種明かしをスズはあっさりとしてしまった。どのみちこれ以上は戦えないし、これ以降戦うこともないだろう。別に自分の手を明かしたところで痛くもかゆくもない。
そんなスズの心中を知ってか知らずか、燎太は苦笑して言った。
「まあ、いいでしょう。引き分けで」

「ありがとう」

◆◇◆◇◆◇◆

「じゃあ、これですっきりしたしやめといてあげる」
「それはどうも」
「右を殴られたら左も殴られろってやつだよ。だいたい好きにやってたんだし、それくらい受け入れなっての。まあ、世界同士の干渉、衝突で生じた歪(イビツ)はボクがしっかり処理しといてあげるよ。好きなだけ巻き込めばいいさ」
「あなたは参加しないのかい」
「そうなったら拮抗するのはキミぐらいしかいないよ。そしてボクはキミとは戦いたくない」
「なぜ」
「キミ一人殴るためだけに費やした労力を考えるとね。惜しむ気はないけれど面倒だというのが、本音かな。キミだって、ボクに対してはそうじゃないのかい？」
そう言って真っ赤なドレスを着た彼女はその空間から消えた。
「やれやれ、世界はまだまだ広い。それだけに他の参加者達の戦いも、楽しみだ」
一人残された五十嵐天成はニヤリと笑う。その姿は異様なまでに様になっていた。

（後書き）

ここからは企画のほうにないあとがき

ども、短編なんであとがきに現れましてございます。
いかがだったでしょうか。ごめんね、五十嵐君殴っちゃった。うちのこアリスは五十嵐君殴れます。スペックは五十嵐君に近いてか同じぐらいと思ってくだされば……。もちろん、スペックは近くてもそれを構成する部品は違います。ほんとです。五十嵐君が異能の集合体なら、アリスは一つの異能を応用する感じ。まあ、魔法なんですけどね。
アリスは五十嵐君の反撃回避にめちゃくちゃ結界術つかってます。ほぼ同スペックだとわかってるから準備は念入りに行ってます。
という簡単な説明。
あ、スズと戦いたい、なんて方がいたら声をかけてくださるとうれしいです。詳細な設定をきちんと公開しますんで。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9099s/

戦闘シーンを書く企画【スズ・レイゾイールVS神野燎太】

2011年5月2日18時25分発行